# 東京駅の全窓を「三協アルミ」が復原

2012年10月1日にグランドオープンした東京駅丸の内駅舎。マスコミにも採り上げられ耳目を集めていますが、ここに三協アルミのサッシが全面採用されています。この復原工事は受注までに3年、工事期間に5年を要し、足かけ8年という長期にわたるプロジェクトでした。そこには、三協アルミの高い技術力とものづくりにかける情熱が凝縮されています。

## 約100年前に創建された重要文化財の窓を木の風合いを持たせたアルミで再現。

東京駅の窓は、戦後の改修で素材を木からスチールに替えましたが、今回の改修工事ではアルミを用いて、大正3年の創建当時と同じ木の風合いを再現するという「復原」でした。当時の窓も図面も残っていない中で、復原の基本方針に沿って重要文化財としての価値を損なうことなく、辰野金吾によって創建された当初の姿に再現することが当社の使命でした。

上げ下げ窓 外観

製品イメージをつかむため、辰野金吾が設計した岩手銀行（旧盛岡銀行、明治44年竣工）を視察。窓種や窓の外観・内観、使用されている金物、框（かまち）などを調査しイメージを確立していきました。木の風合いを出すために、それぞれの窓の実物大モックアップ（試作体）を何体も作りながら、いわば重要文化財をつくる意識で再現しました。

## 微妙な色合いやサッシ表面に木の質感を出すために、サンプル作成を繰り返す。

窓の意匠、特に色や表面の風合いには細心の注意を払いました。設計事務所やゼネコンから細かい指示があり、それを実現するために新湊工場が標準装備しているフッ素塗装ラインを活用。何色ものミニチュアサンプルを作成し、納得の行く色合いが出せるまで試作を繰り返しました。同一の工場敷地内で塗装→加工→組立まで一貫生産できるメリットが最大限に活かされたと言えます。

また、サッシ表面が木に見えるように、ツルツルでもなくザラザラでもない状態に仕上げることにも苦心しました。製品検査は過去に類を見ないほど厳しく、普通の品質検査ではOKのレベルでも、今回の工事ではNGというケースもありました。ともあれ、営業、生産と各部門横断のプロジェクトチームが一致団結して取り組み、歴史的に価値ある復原工事を完遂できました。

新湊工場 塗装工程